

四季のある暮らしのありがたさ

教育・昭和 45 年卒 小倉 健治

退職するころまでは春夏秋冬という四季のありがたさを特に感じることもなく、四季があるのは当たり前のこととしてとらえていたように思います。

小学生のころは夏休みが待ち遠しくて指折り数えて待っていました。ニイニゼミが「ニイーニイー」と鳴き始めると梅雨が明け、アブラゼミが「ジージー」と鳴き始めると盛夏を思わせました。朝露に濡れたアサガオの花、青空に映えるヒマワリ、むくむくと盛り上がる入道雲、夕方には決まったように降った夕立、井戸水で冷やしたスイカのおいしかったこと、今も鮮明に思い出されてきます。セミやトンボ、カブトムシやクワガタを追いかけ回し、友と川で一日中遊び呆けていました。ツクツクボウシが鳴くころにはその鳴き声が私には「夏、夏、惜しいー」と聞こえてきました。夏休みの楽しい思い出とともに夏が一番好きな季節でした。

秋は「実りの秋」のイメージが小学生のころから続いています。小学生のころはカキが熟れるのを待ちきれず食べ、よくお腹をこわしていました。野山ではアケビやナツハゼ、ヤマブドウを採りほおばっていました。

冬は小学生のころは嫌いでした。軒先につららが見られたり、雪の降る日も今よりは多かったように思います。手にはあかぎれができ、入浴したりするとしみてとても痛かったのも忘れられません。

春はだんだんと暖かくなってくるので、子ども心にも春を待つ気持ちが十分あったように思います。

定年退職後は山間部にある生家に行き、時には泊まったりしながら、畑の草刈りをしたり、裏山の間伐をしたりしながら暮らすことが多くなってきました。夏には刈っても刈ってもすぐ伸びてくる草の勢いにうんざりし、少々作る野菜も収穫時になるとサルやハクビシン、イノシシなどに食べられ、がっかりすることも度々です。

山にこもって作業をしていると、一日中誰にも会わないこともよくあります。こんな時、薪づくりなどに励んでいると、ヤマガラがやってきて周りを飛び跳ねて付きまといまいます。人懐っこくてかわいいものです。早春、初めてシュンランやエビネを見つけた時の喜び、フキノトウを見つけ、天ぷらにして味わうほろ苦い味で「春が来た」ということを感じさせてくれたりもします。二、三日人と会わないと寂しい限りですが、このようなことが心を慰めてくれたりもします。

薪をストーブで燃やすと小さな家全体をほんわかと温めてくれます。ストーブは魚を焼いたり、焼き芋をしたり、猪肉を煮込んだりと調理にも重宝しています。寒い時はストーブの前に座り込み、炎を眺めたり、音楽を聴いたり、ストーブ料理で作ったものを食べたりしながら過ごすことが多くなってきました。いつしか冬を心待ちするようになってきている自分に気づきます。

春夏秋冬という四季があるということは大変ありがたいことだと年齢を重ねるにつれ、思うようになりました。四季のある暮らしに感謝しながら、季節の移ろいや生き物とのかわりを楽しみながら、日々暮らしていければと願っているこのごろです。